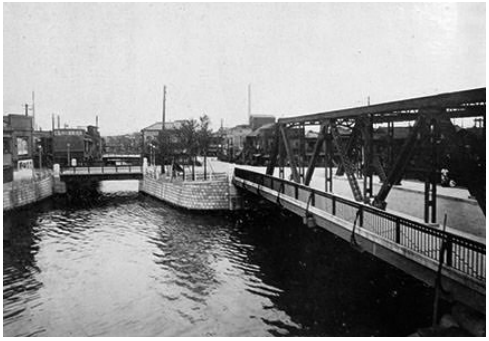
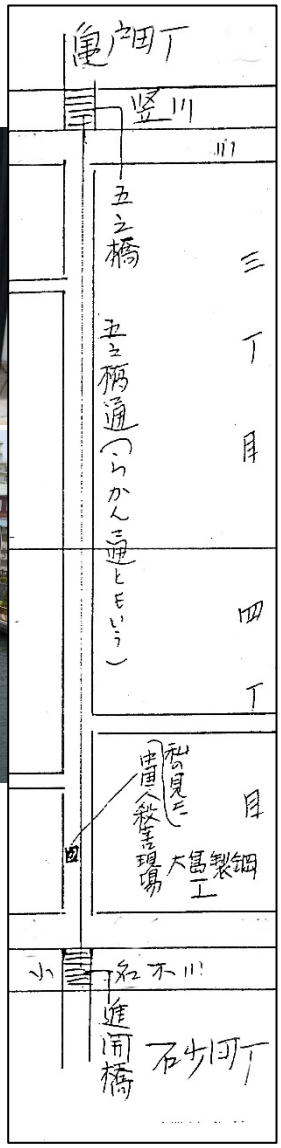
② 五の橋



亀戸駅から南に行くと、高速道路の下が五の橋であり、そこを東西に竪川が走っている。今は暗渠になっているが、その東の端、中川に出るところに逆井橋がある。五の橋の手前の五の橋会館（今は薬局になっているあたり）が、平沢計七のよく使っていたところである。そこから南の小名木川に架かる進開橋に向けて中国人宿舎がたくさんあった。

（写真右は、1930 年頃の竪川）



③ 進開橋

進開橋では中国人虐殺を高梨輝憲さんが目撃した。（地図は高梨証言の一部）

（写真は現在の進開橋と小名木川）

〔高梨輝憲さんの証言：進開橋での虐殺を目撃〕

（九月三日）

巡査と別れた私は、さきに来た道を進開橋まで引返えした。ふと橋の上を見ると大勢人だかりがして、何やらざわめいている様子、私は何事かと思って行って見ると、橋の欄干に一人の男が後手に縛られて寄りかかっていた。そのまわりに騎兵の襟章をつけた軍人が三人ばかり立っていた。それを取りかこんでいる群衆は口々に「この野郎朝鮮人だ、やっつけてしまえ」と罵しっている。そのうち軍人の一人は、いきなり軍刀を抜きはらいその男の頭上目がけて斬りつけた。途端に鮮血がさっとほとばしった。斬られた男は「うー」と唸ったがそれ以上の声は立てなかった。その筈である。男はこの時までに既に散々いためつけられてなかば失神状態になっていたからである。軍人は斬りつけるとすぐ両足をかかえて欄干ごしに川の中へ投げこんでしまった。投げこまれた男は一旦沈んだが、やがて顔を水面に出して浮きあがった。見ると長い頭髪が顔面に垂れさがり、血潮がそれにつたわって顔いっぱいに染め、さも怨めしそうな形相をしてにらんでいるかのように見えた。それは芝居でやる四谷怪談戸板流しの場面を想起させるほどの凄惨さであった。

私は謀らずもこのような凄惨な状態を見た。しかし凄惨な状景はこれだけではなかった。進開橋から五之橋の方へ向かって少し行ったところで、またさきに劣らないほどの惨虐な場面を見た。

三人の男がこれも後手に縛られたまま、全身血まみれになって道路にころがっている。側らには騎兵銃に剣を立てた軍人が五、六人立っていた。騎兵銃は三八式歩兵銃とはちがい、銃に剣が装着してあるから、剣を立てればそのまま銃剣になるのである。ここにも群衆があつまり、倒れている男を丸太や鉄棒で殴りつけていた。男は既に人事不省になっていたらしいが、それでも苦しさのためか、時々うめきながら躯を動かすと「この野郎まだ生きていやがる」と罵りながら、更に強く殴打した。軍人はそれを黙って見ている。私は倒れている一人の男に近づいて見ると、男の尻のあたりに銃剣で突いたらしい生々しい創あとがあった。（『関東大震災体験記』〈1974 年〉4 月 1 日発行　アトミグループ発行）より抜萃）